



### 宮崎県JICA派遣専門家連絡会

#### CONTENTS

アフリカで幕開けした 2025 年

福 林 良 典

世界を多少知っている帰国専門家・ボランティアが地域からできること

藤 江 顕

「次世代継承へのあゆみ」

牧 浩 一



## アフリカで幕開けした 2025 年

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会 理事

宮崎大学工学部 准教授 **福 林 良 典**

2025 年の新年は、エチオピアとケニアとの国境近くのジンカ市で迎えた。TICAD9「Tokyo International Conference on African Development (アフリカ開発会議)」が横浜で開催された年でもあるので、手前味噌の話で恐縮だが 2025 年のアフリカとの関わりを振り返ってみたい。

#### SATREPS

新年をエチオピアで迎えたのは、2019 年より始まった SATREPS 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（研究代表者：京都大学アフリカ地域研究センター 特任教授 木村 亮、JICA と JST の連携事業）の最終年度での活動の追い込みのためだ。

エチオピアのアジスアベバ科学技術大学とジンカ大学、エチオピア道路公社がカウンターパート機関

で、日本側は京都大学、宮崎大学、愛媛大学、名古屋工業大学の研究者が参画した。工学、農学、文化人類学の研究者が集い 2019 年に開始した事業は、コロナ禍や治安悪化による現地活動が困難であった期間を考慮し、1 年間の延長が認められて 2025 年 3 月に終了した。

エチオピアを始めとする東アフリカには、問題土とされる膨潤性粘土が広く分布する。雨季に湿潤状態になると膨潤し泥状になり、乾季には乾燥収縮して固く整形しにくくなる。肥沃で耕作には適しているが、膨潤性粘土地盤の上に道路や建物などの社会基盤を整備するには困難を伴う（写真 1）。放牧される牛すらも、泥濘化した膨潤性粘土の上を歩くのをいやがるという（写真 2）。



写真 1 道路損傷の様子



写真 2 歩行に苦勞する牛

幹線道路では、深さ 1m 程度の膨潤性粘土を良質土に置換することや、セメントを混合して改良する対策が取られる。しかし、一日の交通量が 100 台程度の小規模道路では、道路行政の整備予算は限られるため、幹線道路でのような対策が実施できない(写真 3)。周囲の住民にとってはライフラインであるので、人々はスコップや鍬など自前の農具を持ち寄



写真 3 道路状態が悪く立ち往生する車両

エチオピア国内での研究活動を基本とし成果を出すために、現地の実験室の整備、実験方法の研修、実験結果についての議論を対面とオンラインで進めた。さらに、主要な研究メンバーを日本に呼び、建設現場の見学や各大学の実験室での短期研修を行った(延べ 45 人月)。宮崎大学でも 2019 年と 2022 年に短期研修を受入れた(写真 5)。交通機関の発達した関西圏や、留学生も多く規模の大きい京都大学での研修は、刺激あふれる経験になったことと思う。



写真 5 宮崎大学を訪問した短期研修生

事業開始時は、ドナー側と助成を受ける側の立場で各々の主張が衝突することが多かったが、事業後半には同じ研究目標に向かうワンチームとしての結



写真 7 進捗報告会

り、道路に溜まった水を道路脇へかき出す、コミュニティワークを実施してきた(写真 4)。現地材料を使い、人力施工でも膨潤性粘土地盤上の道路の通行性を改善する方法はないか?そこで、在来植物由来のセルロース系土質改良材の開発研究と、その社会実装に向けた SATREPS 事業が始まった。



写真 4 コミュニティワークに集まる人々

一方宮崎では、地方の自然豊かな環境下での大学の様子を、比較的身近にまた参考にしやすいように感じてもらえたのではと思う。内陸国から来て青島の鬼の洗濯板の景色には感動しており(写真 6)、案内しがいがあった。5 名が長期研修として来日し 4 名がすでに博士号を取得しており、小生が受け入れた 1 名が残るのみである。彼は 2026 年 3 月の学位取得を目指し、追い込み時である。



写真 6 道の駅フェニックスの大撮影会

束力が高まった(写真 7、8)。事業は終わるが、ここで得た関係性を大きな財産として、今後の相互理解や共同研究の推進に活かしていきたい。



写真 8 報告会後の懇親会

## 世界銀行 無償事業

3月末から4月にかけて、約8年ぶりにケニアを訪問した。同じ研究室出身の兄弟子と打合せをし、地域住民の参加による道路整備事業を視察した。日本のNPO法人が、世界銀行から委託を受けて実施している。かつての同僚らがたくましく事業を運営する様子に、感銘を受けまた刺激を得た。



写真9 進捗報告会

## TICAD9

8月は、横浜でのTICAD9に参加した。国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が事業紹介ブースを出しており、私たちが実施してきたSATREPSの成果がポスターで紹介されていた。また、前職時代から交流を持つ国連機関によるサイドイベント(写真11)、かつてJICA専門家として派遣されていた事業の広域展開の報告会に顔を出した。これまで培ったきた関係性を、大学人の立場で今後どう生かし発展させるのか、考え行動していく必要がある。また、TICAD9と大阪・関西万博とのコラボイベント、〈ブルー・アフリカ・ナイト in 大阪〉に招待されたので参加した。NPO法人ゼリ・ジャパン(サ



写真11 TICAD9 サイドイベント

## 国際労働機関によるアフリカ地域会議

5月には再びアジスアベバを訪問し、国連労働機関(ILO)が主催する、人力施工を主体とする道路整備手法に関するアフリカ地域セミナーに参加した(写真9)。SATREPS事業の成果を発表した。主催者にはカウンターパートのエチオピア道路公社の職員がおり、様々な便宜を図ってくれた(写真10)。アジスアベバ科学技術大学の教員らとも再会することができた。



写真10 エチオピア道路公社道路研究所所長と

ラヤ(株)社長が理事長)と笹川平和財団が、日本政府、地方自治体、地域経済団体や万博協会の協力を得て、TICAD9に訪れたVIPを2025大阪・関西万博に招待し、そのためのレセプションカクテルとディナーを「ブルーアフリカレセプション」として、リーガロイヤルホテルで開催した。「ブルーエコノミー」「ブルーオーシャン」をアフリカで実践するため、関西の企業や研究機関と結びつきを強める目的だ。関西圏の知事や国会議員、経済界、国際協力機関が一同に会する大きなイベント(お祭り)であった(写真12)。このような時間をアフリカの人々と共有することも、私たち日本との将来の関係性において意味があることなのだろう。



写真12 TICAD9と大阪・関西万博とのコラボイベント

## 日本の若者の可能性

10月に入り、エチオピアから京都大学大学院に留学している学生が、宮崎大学の私の研究室を訪問してくれた。数日の滞在であったが、この間、研究室の日本人学生が私の予想に反して積極的に交流し

てくれたのは（写真13）、うれしい誤算であった。今の学生にも、国際交流の機会をどんどん提供したいと前向きに思えたのは2025年の一番の気づきかもしれない。



写真13 留学生との交流

## 学位取得に向けた指導

12月は、留学生の学位取得に向けた追い込み時期である。彼は2023年9月に単位取得満期退学をしエチオピアに滞在しているため、オンラインでの打合せを継続している。インターネットの接続はたいてい問題ないが、打合せをすっぽかされたときはインターネットの接続状況が悪い時である。帰国後、大学からの給料が低く副業をせざるを得ず、研究に身が入らない日々が多かったようだ。進捗が芳しくない様子を腹を立ててしまうことも多々あった。相

互理解は簡単ではないが、自分の価値観や方針とあわないとき、まずは相手の事情を受け入れてみるのが重要と反省している。

ここまで2025年の私のアフリカとの関わりを振り返ってみた。今後も、国際協力活動の実践者、研究者、また、ODA現場の体験者として、宮崎におけるさまざまな活動に取り組み、国際協力・交流の促進に貢献していきたいと思う。



## 世界を多少知っている帰国専門家・ ボランティアが地域からできること

JICA 帰国専門家  
藤江 顕

2025年7月、宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会・宮崎県青年海外協力隊を支援する会の総会に出席させていただきました。宮崎大学 吉成副学長の講話で同大学のスローガンが「世界を視野に、地域から始めよう」と知り、自分ができることについて考えてみました。掲題の「世界を知っている」とは日本とそれ以外の国・文化を体感している、という程度の意図ですが、まず自分自身の経験を紹介させていただきます。私、生まれ・育ちは東京・神奈川で、大学で神戸に行ったのが最初の「異文化体験」でした。言葉も行動様式も異なり、日本は広いなあと驚かされたものです。その後、JICA に 22 年間奉職。その間、在外勤務はケニアに 2 回のべ 6 年、ナイジェリア 2 年、米国 2 年。アフガニスタン、南スーダン、ブルンジといった紛争後国への長期出張等々の刺激に満ちた職業生活を送らせていただきました。40 代で体調を崩して早期退職（今はすっかり元気）、妻の実家がある日向市に「移住」してきました。さて、日向でどうやって糊口を凌いでいくか、自分は特技や資格があるわけでもない。というやや消去法的な理由で英会話教室を開き、現在約 100 人の子ども達と学んでいます。教育自体が地域貢献というつもりでやっていますが、国際協力や海外駐在経験で得た「よそ者」の視点を生かすべく、できることをやっています。例えば、イースターフェスティバルというイベントを駅前交流広場で開催しました。JICA 宮崎デスクにも出展いただきましたし、宮崎大学への留学生とその家族 30 名余を招いて地域の子ども達と交流する機会を持ちました。他にも、サーフィンの国際大会で海外からの訪問者への対応についての研修を行ったり、外国人労働者と地域コミュニティの相互理解を進める活動を地元高校生と一緒にやったりしてきました。昨年 8 月には TICAD パートナーイベントとしてイオン日向店内で「アフリカ展」を開催しました。また、ガイジン経験がある方ならご理解いただけるとは思います。自分の文化で大切にしているものを自分の言語でできるのは外国暮らしで重要です。日本食を食べるとホッとするあの感覚です。そこで、日向市のキリスト教会で英語での礼拝ができるようにしました。個人でもいろいろできるのが宮崎県の良い風土ですね。思うに、国

際協力・開発の実務から得たスキルは日本の地方でも有効です。誤解を恐れつつ言えば、現代日本、特に地方の抱えている困難は途上国でも経験しているものと共通している部分があります。例えば、特別な強みとなる産業・特産品もない、独自の開発資金が充分ある訳でもない、最新のノウハウに精通している訳でもない、こういった状況において参加型開発・PCM 手法といったものを活用しながら一歩二歩と進めていくのは JICA 専門家・ボランティアの得意とするところではありませんか？大学の存在も含めて地元の人材がいない訳ではありません。国からの委託事業を、「実績のある」東京の大企業に発注して資金やノウハウが地元に残らないというのはもったいない。日向市でも JICA に限らず、色々な経験をして、地域に貢献したいと願っている人は少なくありません。ただ、そういった人たちを社会課題につなげる方法がない。ましてや有償で知見を発揮してもらおう機会となるとかなり限られていると言わざるを得ません。各自治体には、地元にいるリソースパーソンの活用、ソフト系業務の地元業者への入札参加にもう一歩踏み込んでいただきたいですね。日向で言えば ODA（小田）さんというやたらと人を知っている人がいて、彼に聞けば誰かにつながります。そういった民間の人を通じて、地域の実情と地元人材のマッチングを図る機能があれば、かなり進むのではないのでしょうか。JICA 帰国専門家会もそのリソースになり得ると思います。あそこであらゆる経験をした人がいる、この分野の専門家がいるということ把握できますから。こういった機能を果たすことができれば、国際協力の成果の日本国内への直接的な「還流」になると思います。宮崎の大らかな風土に、外部の視点を入れていくと、地域の振興につながってくるのではないのでしょうか。



アフリカ展の様子



## 「次世代継承へのあゆみ」

宮崎県商工観光労働部 観光経済交流局 国際・経済交流課  
課長 牧 浩 一

はじめに

宮崎県では、令和元年（2019年）6月に「みやざきグローバルプラン」を策定し、令和4年度まで4年間、経済交流の強化や国際交流の促進、多文化共生社会づくり等の総合的な展開を図ってきました。

令和5年度に「みやざきグローバルプラン」を改定し、コロナの影響で道半ばとなっていた取組を着実に積み重ね、経済・人的交流の回復を図るとともに、第2期も引き続きグローバルな視点から取り組むべきグローバル関連施策を総合的かつ計画的に推進しております。

本県のグローバル関連施策は、計画の理念を踏まえ、3つの施策の柱に沿って推進しており、そのうち「国際交流の促進とグローバル社会で活躍する人づくり」の中に「宮崎県人会世界大会を契機とした交流の強化」を位置付けています。

### 「宮崎県人会世界大会」の開催

宮崎県人会は、国内外で暮らす宮崎県出身者などが会員相互の交流や本県との親善を図るために結成された会であり、令和7年11月時点で、国内に14、海外に23設立されています。

国内外の県人会では、それぞれの会員の親睦を深めながら、ふるさと宮崎のPRに寄与するための取組を展開していただいている一方で、近年は、高齢化や世代交代により本県との繋がりが薄れていくことが懸念されております。

こうしたことから、国内外の県人会が一堂に会し、県民との交流を通じて、改めてふるさと宮崎への思いや絆を深めていただくため、置県140年となる令和5年に「宮崎県人会世界大会」（以下、世界大会）を本県で初めて開催することとなりました。

令和5年（2023年）10月27日から3日間にわたって開催された世界大会には、海外19、国内14の県人会から総勢270名の会員が参集し、県民参加型のイベントとして盛大に開催されました。

大会では、県人会長会議や県人会次世代会議、海外県人会プレゼンテーションなどが催され、県人会

の活動事例紹介を通じて若い世代が参加しやすい企画の重要性について意見交換が行われるなど、活発な議論がなされたほか、記念式典では、県人会長会議で採択された「ふるさと宮崎への思いを次世代に継承する」、「ネットワークの拡大・強化に努める」、「宮崎県の魅力を国内外に発信する」などを掲げる大会宣言が発表されました。

また、市町村・企業PRブース、伝統文化体験、ふるさと巡りツアーなど、本県の魅力を再発見いただけるプログラムを準備し、参加者からは「県と県人会、県人会同士の繋がりが深まった」という声を聞くことができました。

この世界大会の開催により、幅広い世代の参加者間の相互理解や交流、県と県人会同士のネットワークの拡大、ふるさと宮崎の魅力の再発見、などの成果を得ることでできました。

### 「第2回 宮崎県人会次世代育成会議」の開催

この世界大会を契機に築かれた繋がりを活かし、県人会の次代を担う人材を本県に招へいして、次世代育成のための交流や意見交換などを行う「宮崎県人会次世代育成会議（以下、育成会議）」を昨年度に続き、宮崎県庁で開催しました。

第2回の育成会議には、17の国内外の県人会から18名の会員が参加し、令和7年11月7日から2日間にわたって世界大会後の各県人会活動の報告や知事との意見交換を実施しました。

また、新たな試みとして高校生・大学生に加え、JICA海外協力隊員の方にも会議に参加していただきました。「若者との意見交換」では、「10年後の宮崎の未来の一日」をテーマに、県人会、学生、海外協力隊員によるグループトークを実施しました。現地での実践経験を持つ協力隊員の視点、海外との繋がりを有する県人会の経験、そして若者の発想力が交わることで、「宮崎から世界へ挑戦する具体的なイメージ」が共有され、若者にとって大きな刺激となったのではないのでしょうか。

このように、海外で国際協力に携わる若い世代の

経験を県内へ還元するとともに、県人会が培ってきた海外ネットワークと結びつけることで、若者にとって将来のキャリアや海外挑戦の可能性を考える契機になり、参加した協力隊員の方にとっても帰国後の県内での活躍の場を見据える機会となったのではないかと考えています。県人会にとっても、自らの経験やネットワークを次世代に繋ぐ役割を再認識し、次世代とともに県の未来を一緒に考える場となりました。

今後は、県人会活動を通じた海外と県内の若者との交流機会の創出など、国際人材が循環する仕組みづくりを図り、宮崎と世界を結ぶ多世代のネットワークを一過性でなく継続的に育ててまいります。

おわりに

参加者からは、「世界大会後に築かれた繋がりをさらに深めることできた」、「宮崎県の魅力を再確認し、次世代へ繋ぐために県人会活動をさらに活発に行っていきたい」といった嬉しい声が多く聞かれ、今回の育成会議が県人会の活性化・ネットワークを強化するとともに、県人会と県内の若者を繋ぐ絶好の機会となりました。

引き続き、本県の「グローバル関連施策」の理念のもと、「挑戦」から「成果」へ・「共存」から「共生」へ世界に開かれ、世界を舞台に活躍するみやざきを目指してまいります。



「若者との意見交換」でのグループトークの様子



知事との意見交換

## 編集後記

JICA エキスパート宮崎第 28 号をお届けさせていただきます。今回は JICA 派遣専門家としてケニアに赴任されたのちにご帰国中の藤江会員に寄稿いただきました。JICA の国際技術協力を携わったご経験を、宮崎で国際協力・交流を推進する活動へと展開されている様子を紹介いただきました。

また、宮崎県商工観光労働部 観光経済交流局 国際・経済交流課の牧課長に、宮崎県「みやざきグローバルプラン」に基づくグローバル関連施策のうち、「国際交流の促進とグローバル社会で活躍する人づくり」の中の「宮崎県人会世界大会を契機とした交流の強化」について紹介いただきました。世界に開かれ、世界を舞台に活躍するみやざきを目指す県のグローバル関連施策の推進に、宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会が貢献できるとよいと個人的には思います。将来の協働につながればと期待します。

幹事団からの投稿として、庶務幹事の福林が 2025 年のアフリカ体験を振り返らせていただきました。

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会では、国際協力と共通話題として地域と世界がつながり、ともに明るい未来を創造していくことに、少しでも貢献できればと考えております。本連絡会の活動について皆様のご提案、ご意見をお寄せください。ご連絡は下記までお願いいたします。

会長 大澤健司 osawa@miyazaki-u.ac.jp

幹事 佐伯雄一 yt-saeki@miyazaki-u.ac.jp

井上果子 kako.inoue@miyazaki-u.ac.jp

福林良典 fukubayashi@miyazaki-u.ac.jp

事務局：〒 889-2192 宮崎市学園木花台西 1 - 1 宮崎大学工学部内

編集責任：福林良典